

今週の為替相場見通し(2022年5月2日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		126.97 ~ 131.25	129.85	128.00 ~ 132.00
ユーロ	(ドル)		1.0470 ~ 1.0852	1.0542	1.0300 ~ 1.0650
(1ユーロ=)	(円)		134.79 ~ 139.18	137.01	135.00 ~ 139.00
英ポンド	(ドル)		1.2412 ~ 1.2922	1.2577	1.2300 ~ 1.2600
(1英ポンド=)	(円)	*	159.65 ~ 165.57	163.00	161.00 ~ 165.00
豪ドル	(ドル)		0.7055 ~ 0.7265	0.7059	0.7000 ~ 0.7150
(1豪ドル=)	(円)	*	90.46 ~ 93.53	91.65	91.00 ~ 92.70

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1)今週の予想レンジ: 128.00 ~ 132.00 円

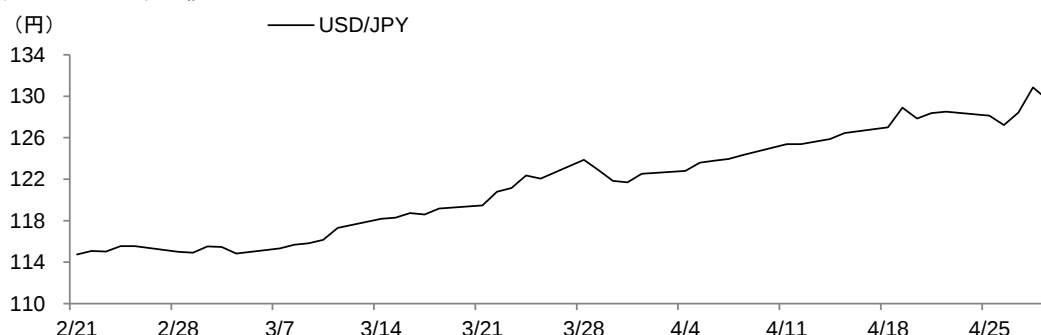
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半にかけて年初来高値を更新する展開。週初25日、128.60円付近でオープンしたドル/円は仲値にかけて128.80円台後半まで上昇したが、中国のコロナウイルス感染拡大による景気減速懸念の高まりからリスク回避の動きが散見、日経平均株価やアジア株の軟調推移を受けてじり安の展開。海外時間でもその流れは継続し、米金利低下も相まって127円半ばまで下落したが、終盤にかけて主要株価の持ち直しに128円台前半まで回復した。26日、ドル/円はアジア時間に上値を伸ばすも、その後はじりじりと下落。海外時間では、ポジション調整の動きも散見され127円ちょうど付近まで急落したが、追加材料に欠く中で127円台前半での揉み合いとなった。27日は前日の流れを引き継ぎオセアニア時間にドル/円は週安値である126.97円まで下落。しかし、その後は株式市場の持ち直しや米長期金利上昇に伴うドル買いが支援材料となり128.60円までじりじりと上昇した。28日は日銀の金融政策決定会合で、指値オペを毎営業日実施する方針を示すなど、強力な金融緩和を維持する姿勢を示したことを受けて円売りが加速し、週高値である131.25円まで上昇。29日は本邦が休日となる中、ドル/円は調整売りが入り129.30円台まで下落。しかし、米株価が大幅安となる中で、リスク回避のドル買いからドル/円は下落幅を縮小させ、129.80円台で越週した。

今週のドル/円相場は底堅い推移を予想する。先週は日銀の金融政策決定会合が28日(金)に実施され、現在の緩和的な政策の維持を決定。加えて指値オペを原則毎営業日実施することが明らかになり、ドル/円は131円台と2002年4月以来の高値をつけた。今週については米国において、3日(火)~4日(水)にFOMCが開催される。市場では+50bpの利上げは100%織り込み済みであり、市場の注目は+50bpの利上げの継続性や+75bpの利上げの可能性についてだろう。仮にパウエルFRB議長がタカ派的なスタンスを表明した場合、日銀が緩和的なスタンスの継続を決定した直後であることや、本邦輸出企業が不在な中、ドル/円は高値を更新する展開となると考える。ただし、米国の株式市場は金融引き締めを嫌気する格好で下落しており、米株価が大幅に崩れる場合には注意したい。また、重要な経済指標としては、2日(月)に米4月ISM製造業景況指数、4日(水)に米4月ISM非製造業景況指数、6日(金)に米4月雇用統計を予定している。

(3)先週末までの相場の推移

先週(4/25~4/29)の値動き: 安値 126.97 円 高値 131.25 円 終値 129.85 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.0300 ~ 1.0650 135.00 ~ 139.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は下落。週初、早朝に仏大統領選でマクロン氏再選の報道を受け、週高値1.0852まで上昇するも、ユーロ買いの流れは継続せず。東京時間は1.0810でオープンすると、株式市場の軟調推移を横目にユーロ売り優勢の展開。一時1.07台を割り込む場面もあったが、終盤にかけては若干買い戻され1.07台前半を推移。26日、新規材料に欠ける中、ウクライナ情勢の悪化懸念が意識されたか、ユーロを手放す動きが活発化すると、1.07ちょうどを割り込み、1.0636付近まで下落。27日、ロシア国営ガス会社が天然ガス供給を停止したとの報道が伝わり、ウクライナ情勢の不透明感が高まる中、ユーロ売り圧力が強まると、約5年ぶりの水準となる1.05台へ突入。その後、米金利上昇も相まって下値を模索する展開が継続し1.05台前半まで下落。しかし、終盤にかけて1.05ちょうどレベルがサポートとして意識され、1.05台半ばまで買い戻された。28日、ユーロはじり安に推移すると、節目1.05ちょうどを割り込み週安値1.0470まで下落。売り一巡後は1.05ちょうどを挟んで小動き。本邦休場の29日、ポジション調整のドル売りが進んだほか、EU圏内のインフレ率加速が意識される中、一時1.0593付近まで上昇。米金利の上昇が重しとなり1.06台に乗せる展開とはならず、1.0542で越週した。

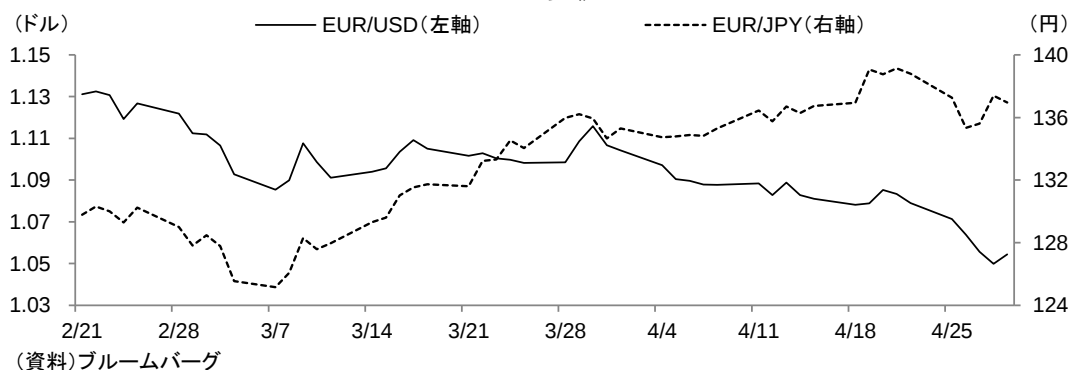
今週のユーロは軟調な展開を予想。欧州圏でもインフレが高進する中、ECBのタカ派化が想定されるが、金融政策の正常化という点で、米国から遅れを取る状況は継続。3月以降、Fedの相次ぐタカ派的発言により、米国の利上げ、早期QT開始は相応に織り込まれていると考えていたが、今になって米株が調整している点を考慮すると、まだ織り込み余地を有している様子。3日(火)から開催されるFOMCを消化することで改めて金融政策格差が意識され、ドル買いユーロ売りの流れとなると考えている。また、ウクライナ情勢についても、ロシアにとって重要な対独戦勝記念日(5/9)に向けて警戒感根強く、リスク回避的な動きの強まりから、ユーロを手放す展開が継続すると考えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/25~4/29)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0470 高値 1.0852 終値 1.0542

(対円) 安値 134.79 高値 139.18 終値 137.01



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2600 161.00 ~ 165.00 円

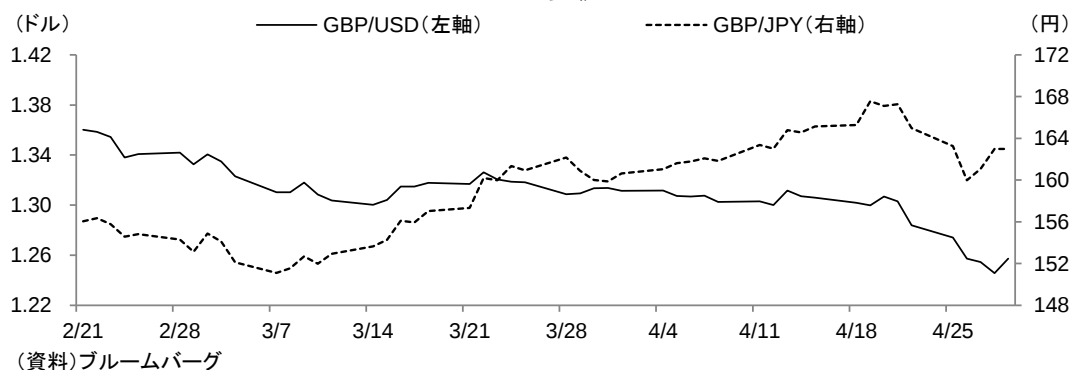
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル、対円共に明確な下押しが先行。週引けまでにはそれぞれ底値を打って反発したものの、そのタイミングや値幅は対ドル、対円、対ユーロ(週を通して小動きに終始)で大きく分かれた。先週の主要通貨市場(特に週前半)の展開は、明確にドル全面高と言えたが、3月半以降、ドル高をけん引してきた感のあったドル/円だけは、逆に調整的なドル軟調が先行した。米連銀による大幅利上げ観測の高まりが、引き続きドル高の追い風になる環境で、代わってこの間のドル高を引っ張ったのはユーロ/ドル(の下落)で、26日、ロシアがポーランドとブルガリアへの天然ガス供給を止めると、ドイツなど他のEU加盟国へのガス供給途絶、景気後退を警戒して、ユーロは下げ足を強めた。英のロシア燃料依存は、大陸欧州との比較で極めて低く(天然ガスの4%、原油の8%程度)、仮にロシア産燃料輸入が止まったとしても、英経済への影響は限定的なはずだが、この間、ポンドはユーロに連れ安する展開が目立った。調整的な堅調推移が先行した円は、28日の日銀金融政策決定会合に前後して、同銀が円相場(輸入物価)の安定よりも長期金利の安定を優先する姿勢を明確にしたことで再び下落。対円でのポンド底打ち(週の安値は27日のアジア時間朝につけた159.65円)は、対ドルでのそれ(週の安値は28日の欧州時間午後/北米時間午前につけた1.2412)に先行することになった。

今週の英ポンド相場は、様子見気分の強い膠着の先行を予想。週初、英市場は連休(4月30日~5月2日)となり、動意に乏しい滑り出しが見込まれる。更に、5日(木)に英中銀金融政策委員会の結果発表、英地方選が予定されるため、連休明け後も、イベント待ちの様子見が続く可能性が高いのではないかと。2~3月の英経済指標は、CPIの続伸/高止まりに、小売売上高の低迷という最悪の組み合わせ(スタグフレーション)を示してきた。英中銀ベイリー総裁は、英中銀の金融政策運営に関し、物価抑制と景気浮揚の間の難しい綱渡りが要求されると述べており、来週の金融政策委員会に向けた市場の思惑も交錯している。足元ポンド全面安(輸入物価押し上げ要因)や米利上げ加速観測の強まりなどに鑑みると、英中銀の意向も追加利上げに傾倒しているのではなかろうか。ただ、英中銀の利上げ姿勢は、米連銀や欧州中銀のそれとの比較で、明らかにモメンタムが失速しており、実際に+25bpの利上げが発表されたとしても、それが僅差の決定であったり、委員会後の記者会見などで追加利上げに消極的な姿勢が示されたりした場合には、ポンド買いで反応するよりも、ポンド売りを誘う展開の方が警戒される。英地方選は、米中間選挙のように、そもそも(中央政界における)政権与党に批判的な結果になるのが普通だが、今般、ジョンソン首相の(ロックダウン中の)パーティ疑惑やスナク財務相の(妻の)英納税回避批判などのスキャンダルが相次いでおり、与党保守党の大敗が見込まれている。余程の大敗を喫したとしても、通常、中央政界への影響は限定的なはずだが、次期総選挙は2024年末までと、まだ2年半も時間があることから、この首相では総選挙を闘えない、時間のあるうちに党の「顔」を替えた方がよいなどといった声が与党内から高まる可能性も考えられよう。仮に英政局の流動化があれば、少なくとも当初は、ポンドを含む英資産市場で嫌気される可能性の方が高いものと予想される。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/25~4/29)の値動き: (対ドル) 安値 1.2412 高値 1.2922 終値 1.2577
(対円) 安値 159.65 高値 165.57 終値 163.00



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7000 ~ 0.7150 91.00 ~ 92.70 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.72台半ばから0.71割れまで下落。25日、中国のコロナ新規感染者拡大を背景に、上海に加えて北京でもロックダウンが実施されるとの見方から中国景気減速が意識され、リスクオフの流れに。株価下落につられて豪ドルも下落し、一時2月来安値0.7135を付けた。26日、序盤は米ドル安の流れからしっかりと値動きで0.72台前半まで上昇。その後、中国景気減速懸念を背景としたリスクオフの動きから株価が大きく下落する中、ドル・インデックスは2020年来の高値を更新。豪ドルは0.71台前半まで大幅下落。27日、予想以上に強い豪1～3月期CPIの結果を受けて買いが優勢となるも、その後、リスクオフ地合いへの一服感から米金利が上昇する中、米ドル高、豪ドル安の展開となった。次回RBA政策理事会での利上げ確率が高まったとの解釈ではあったが、既に大部分が市場に織り込まれていたことから、上昇幅は限定的であった。29日、豪ドルは豪金利が上昇する中、序盤は買いが優勢となり一時0.7180まで上昇。NY市場時間に入り、ハイテク株を中心に株価が大幅下落すると、豪ドルも売りが優勢となり0.7060近辺で引けた。

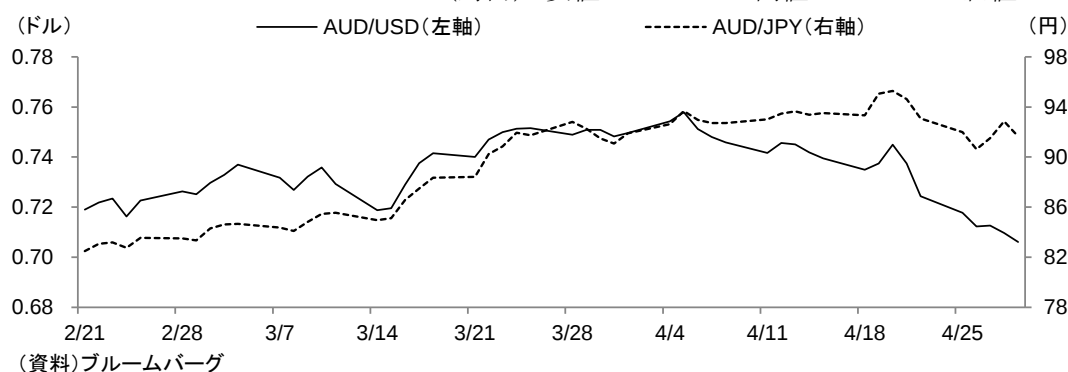
今週の豪ドルはRBA、FOMCの結果次第で大きく振れる可能性がある。先週発表された豪1～3月期CPIヘッドラインは前年比+5.1%と過去20年来の高水準に達し、RBAが注視しているトリム平均値(コアインフレ率)は前年比3.7%と、目標値2～3%を大きく上回った。新築住宅やガソリンを始め、過半数の項目で上昇が確認され、インフレのすそ野拡大、圧力の高まりが意識される結果となった。次回RBA理事会での利上げ確率が高まったものの、FRBがより積極的な引き締めをするとの観測から、豪ドル上昇幅は限定的となっている。今週のRBA理事会では利上げを予想する向きが大半となっており、その利上げ幅が論点となっている。今後の豪ドル相場の行方を見極める上で、まずは3日(火)RBA、4日(水)FOMCの結果および市場の反応を確認したい。RBA、FOMCともに、市場では既に積極的な利上げを織り込み済みであることから、仮に予想程タカ派的な内容とならなかった場合、相場が大きく反応する可能性には留意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/25～4/29)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7055 高値 0.7265 終値 0.7059

(対円) 安値 90.46 高値 93.53 終値 91.65



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。